

函館の夏（大野恵造）

白波の 立待岬は 見えがくれ

君の 心も 砂山の

砂に 埋れて 見えがくれ

啄木作の短歌

いのち 無き 砂の 哀しさよ
さらさらと

握れば 指の間 より 落つ

空しきものは 交し たる

あの日の 誓 腹這いて

かなた 見やれば その女の

面輪に 通う 玫瑰の花

解説 大野恵造作の「啄木の四季」の一節。

啄木は洪民小学校を解雇され函館に移住しました。函館では運良く、函館区立弥生小学校の代用教員の職を得たのです。この小学校に女教師の橘智恵子が在籍していました。教員室では智恵子と話をしたと思えますが、啄木が智恵子と二人きりで直接話したのは二度で有ると言われています。その啄木が一方的に智恵子への思慕を募らせましたが、智恵子は啄木に対してそれほど歓心が無かったものと思えます。

語釈 ※立待岬＝北海道函館市住吉町にある、津軽海峡に面した岬。※面輪＝顔。顔面。※玫瑰＝バラ科の落葉低木。中国原産。茎はとげを持つ。五、六月ごろ、芳香のある白または紫紅色の八重の花が咲く。

解説 波の間から見える立待岬は見えたり見えなかったりする。君（橘智恵子）の心も砂に埋もれて見えたり見えなかったりする。

短歌 命を持たない砂は儂く悲しい。握ればさらさらと指の間から落ちてゆく。まるで君の心のようにだ。

通釈 あの日に交わした誓いは空しい。砂浜に腹這いて遠くを見ると、玫瑰の花が君の顔に見えてくる。